

1995-26

チッソ・水俣

- 工場技術者たちの告白
- 第1章 企業の内幕
 - 第2章 失われた健康の日々
 - 第3章 朝鮮から水俣へ
 - 第4章 水俣病発生
 - 第5章 有機水銀説を主張した男
 - 第6章 埋もれていく真実
 - 第7章 企業内研究の経緯
 - 第8章 再燃

東大全共闘

- 26年後の証言
- 第1章 坂田龍彦陰謀
 - 第2章 学生たちのいらだち
 - 第3章 全共闘結成
 - 第4章 巨口巨舌の凶器
 - 第5章 奇襲から国家へ
 - 第6章 東大を揺るがすのは全共闘運動
 - 第7章 全共闘運動の激



●水俣病の原因がみずからの工場にあることを突き止めていた技術者たち。彼らはようやく語り始めた。

●大学への失望。戦後体制の否定。全共闘の学生たちは、なぜ暴力を容認し、自壊していったのか。

戦後50年

第3巻

チッソ・水俣
工場技術者たちの告白
東大全共闘
26年後の証言

NHK取材班



50
その時日本は③
チッソ・水俣 工場技術者たちの告白
東大全共闘 26年後の証言

NHK取材班

NHK出版



9784140802106



1910321019003

橋爪も、不当処分に対する「単純な怒り」から、闘争に参加していくことになった。

医学部の今井は、続々と集まる学生たちを見て驚いた。

「私にとっても全く新しい経験だったんですけど、学科ごとクラスごとにそれぞれ旗を押し立てて安田講堂に抗議に押しかけてきたんです。その光景を見て、私はもうたいへんびっくりしました。それまでの学生運動というのは選挙で選ばれた指導部があって、その指導部が方針を出すことによっ

くしくも六月一七日、駒場の教養学部では、自治会の執行部が民青（共産党系）からフロント（新左翼系）に変わったばかりだった。一報を受けた新執行部は、早速手際よくバス四〇台を手配して学生たちを安田講堂のある本郷キャンパスへ輸送した。

教養学部の二年生だった橋爪大三郎もバスに乗った。

「バスが手配してあるからみんな本郷にとにかく抗議に行こうというので、みんな大慌てでクラスの旗なんかつくりました。訳もわからないままバスに乗ったような人も大勢いるわけですから、そういう人には医学部の問題を一から説明するようなビラが配られて、バスの中でもクラス討論というわけですね。

活動家などでもないんですけど、とりあえず事実関係を知りたいとか、学校の説明を求めたとか、いろんな立場の人がみんな一緒だった。みんなおとなしい格好をして、クラスの仲間と一緒にバスに乗っていた。共産党系の人も新左翼セクトの人も誰もかれもみんな同じバスに乗って、安田講堂前の広場で同じ集会に参加しているという牧歌的な状態でした」

しかし、日本の針路と団塊の世代を取り巻く環境には厳しいものがあった。

彼らにとって、最初の大きな世代経験といえるべきものが六〇年安保闘争だった。松田と同じ年に東大に入学した橋爪大三郎は、こう回想する。

「私は小学校六年生で何もわからなかったけれども、六〇年というのは非常に印象に残っていて、次が七〇年だ。七〇年には何かあるはずだ、何かなければならぬ、ということはずっと考えていました。指折り数えてみると、ちょうど大学の三、四年で、これはちょうどいいと思ったのは覚えていいます。みんなもそう思っていたのではないのでしょうか」

一九六四年に入学し、全共闘の中心メンバーとなる大橋憲三も、六〇年安保が全共闘運動に影響している指摘する。

「大学はつまらなかった。特に大教室での決まりきった講義というのはつまらなかったんだけど、教官たちが建て前て信じて教えていることと、実際に社会を動かしているものとの間にギャップがある。そういつた『うそくさい』という実感が、学生をしらせさせていたんじゃないかと思えます」

厳しい受験競争の果てに東大の門をくぐった若者たちは、大学に失望するなかで社会との関係をおかたてて自問していくことになる。ほかの多くの学生がそうであったように、松田の場合もそのきっかけになったのはベトナム反戦運動だった。

書くようなことがあった。そういう意味では、ものすごく魅力のない学校ですすね」

松田と同じ一九六七年に東大の文科三類に入学した社会学者の橋爪大三郎（現在四七歳）も、学生の感じていたいらだちを次のように表現する。

独特の組織形態には、それまでの左翼党派に対する批判も込められていた。橋爪大三郎は言う。

「全共闘の考え方というのは、共産党の組織形態を全部ひっくり返してつくってあると考えればいいと思います。共産党とか新左翼の組織はどうなっているかというところ、細胞があって、委員会があって、それから中央委員会があって、上で決めたことを下のほうに伝える。民主集中制で、下のほうの人は兵隊のようなものであるというかたちになっているんですけども、全共闘はその反対です。中央で決めて下に伝えるというところはほとんどない。

共産党とか前衛とかいうものがあって、自分がそのために尽くしていけばなんとかなるかといえば、そんなことはない。それは裏切りと分裂の歴史である。では、新しい前衛であるところの『革マル』とか『中核』とかそういう組織はどうなのか。これも似たり寄ったりである、とみんな思っていたわけです。

じゃあ何がある。なんにもない。なんにもなければ現実に敗北してもいいの。しかし、現実に敗北するわけにはいかない。自分の中には価値観や信念もあるし、それをなんらかのかたちで社会運動として現実化しなければならぬのではないか。こういうふうを考えて、自分の責任でできることだけをやろうという限定をつけてつくった組織が全共闘だと思います。全く自由ならばばらばら個人の集まりで、いつやめて帰っちゃってもいいんです。『俺が全共闘だ』というふうに言っていると全共闘になってしまふという感じでした」

組織的に見るときわめてルーズであいまい、内と外の境界も不明なアメーバのような感じがするが、それが従来の組織にはない新しい魅力であった。

では、全共闘には新左翼は入っていないのかというところ、そうではなかった。「来る者は拒まず」というのが全共闘の原則だから、党派の活動家も当然入ってきた。文学部では革マル派が強く、教養学部はフロント、医学部は社会学同や解放派の勢力が強かった。彼らが全共闘に入ってくることになんの制約もなかった。橋爪の解説は続く。

「党派からすれば、七〇年安保に向けてなるべくアクティブな学生を大勢集めたいと思っています。それから、全共闘は草刈り場、おいしい餌場に見えるわけですね。そこで、潜り込んで人間関係をつけて、なるべく組織に巻き込もうとする。当然、党派の人たちはたくさんいました。それは、持ちつ持たれつなんです。デモの指揮とか、実際に何かする時には、やっぱり党派の人間は慣れているから便利で

す。パツと動いてくれる。

しかし、全共闘からすれば、彼らに引きまわされたくはない。だから、学生運動の経歴があまりない人たちが全共闘を指導していました。そして、実行部隊にはいろいろな党派の人たちも入っていて、そうじゃない人も大勢入っているというふうな組織でした」

全共闘には、特別の役職がない。しかし、そのシンボルとなった人物はいた。それが理学部博士課程の山本義隆（当時二六歳）である。山本は、代表者会議の司会を務めているうちに、その力量を周囲に認められて「東大全共闘代表」と目されるようになっていく。

どうせそんなことできっこない。そんな空論を言うんじゃない」という反論を受けた。けれども、本当に自分で考えていることを自分なりにできる。二〇歳で、なんでもできるという充実感といいますが、「これからなんにでもなれるし、なんでもやれるんだ」という解放感がありました。僕自身は、「感性の解放」という言葉が非常にびびったりしたんです。要するに、社会から抑圧されずに自分なりの感覚を発揮できるというか、大事にできるという気持ちを中心にあつたように思います」

橋爪大三郎は、同様のことを次のように表現する。

「学内の情勢が目まぐるしく変わっていく。そうすると、自分と関係なしにカレンダーがどんどん動いていくというんじゃないで、自分たちが行動することによって時間も空間も変わっていくんだ」という感覚が得られるんです。それまで中学、高校と管理教育でしぼられてきた状況と比べると、実に「生きている」という感じがするわけです。ですから、そこでこういうふうな世の中に働きかけていくことができるのならば、自分のできることをなるべくやろうと思った人が多かったんじゃないかと思えます」

松田忠も、全共闘運動に進んで加わった。彼は、闘争に託した思いを手記の中で、それまでの教育の中で切り捨ててきた「自由で創造的な自己の発展、感性豊かな人間」へのあこがれとして表現している。

日本に伝わるのは、ずいぶんあとになってからである。

「ベトナム戦争がずっと続いていて、中国では文化大革命も始まっている。今からでは想像できないと思いますが、冷戦はほぼ永遠に続くと考えられていた。こういう冷戦構造が続いているのだから、どこかに突破口がないのか、という若い人たちの運動は、世界で同時代的にあつたんです。若い人々のこうした文化的な盛り上がりというのは、たぶんそのころに初めて出てきたんです。だからそれを背に受けて、日本の学生たちも、政治的な面でも、それから文化的な面でもさまざまな面でも自己主張したいという気持ちが非常に強かったと思います」

橋爪大三郎は、時代の雰囲気こそそう解説する。

橋爪大三郎は、「今、振り返って考えれば、あそこが手の打ち時でした」としながら、それに納得できなかった当時の心境をこう解説する。

「現実感覚があれば、そこでうまく話をまとめなければならなかったのでしょうけれど、全共闘の中にもやはり幻想というものがあつた。これは一学園闘争であるだけではなくて、それを超える意味をもっているんじゃないか。たとえば『七〇年安保』、あるいはもうちょっと全世界的な意味があるのではないか。ここでどこまでも原則的に行動するというところで今後の歴史が変わっていくかもしれない。自分たちは、そういう責任がある、そこで安易な妥協はできないと考えたのではないかと思います」

「自己否定」を唱え、就職も棒に振ることを覚悟し、それを一般の学生にも迫りながら続けてきた闘争である。運動のなかにいる誰もが一種の興奮状態にあつた。七項目のうち六項目の要求で勝ち取ったという、闘争を終結できる状態ではなかった。少なくとも、この時点で闘争を終結することは、闘争を継続することよりもはるかに困難なことであつた。

橋爪大三郎は、東大闘争後も大学に残って社会学の研究を続けてきた。「東大というものに何の権威も認めないこと、そして、自分の社会学に時代の問題を全部引き受けてみることを、ひそかに心に決めた」(「冒険としての社会学」)たうえての選択だった。現在は、東京工業大学の教授を務めている。

「彼らがどんなに理想を追求しているように見えても、では現実の政治、経済をどう動かしていくかという、そういう論理には決してつながらないようになってきているのです。これはあとで私が反省して思うことです。自己否定をはじめとする全共闘の言説——そこにはマルクス主義も、人道主義も入っているし、いろいろなものが入っていますが——それをどういうふうにして足し算、引き算、掛け算、割り算しても、現実を新しくつくり出していくという具体的な設計図まで出てこないのです。そうなるというリアリズムには負ける。リアリズムというのは現在の社会のあり方に責任をもっています。大学当局もそうだし、それから警備当局もそうでしょう。そういう意味では、敗北は運命づけられていたんです」

では、そのような運動の弱点はなぜ生まれたのか。橋爪の議論は鮮やかである。

「権力を否定すべきものだと考えたこと、それから経済を嫌悪すべきものだと考えたこと、この二つによるんです。これは戦後民主主義が暗黙のうちにもついていた倫理観、価値観なんです。私たちは、そういう教育で実際に人生を生き始めようとした、たぶん最初の世代です。しかし、戦後民主主義社会の実体は、自民党の派閥政治に代表されるような政治のリアリズム、そして高度経済成長です。利潤が上がり所得が増えればなんでもいいじゃないかという考え方ですね。だから、戦後を出発させた価値観と、戦後の現実との間に、大きなギャップがあった。

東大の中ではそれが両立していた。東大という知の権威が、マルクス主義を教室でしゃべり、戦後民主主義を新聞に書き散らし、しかし、日本の政治・経済秩序を支える人材を送り出せばそれでいいという機構で、矛盾の塊だった。その中で、一人の人間として生きることができると考えたならば、これは完全な精神分裂になる。そこで、とりあえず東京大学の中で最も醜い部分、最もまちがっている部分というものに対して反対しようと考えたんだと思う。それは自分に密接に関係があったし、そうである必要があった。なぜならば、そういう運動でなければ自分の存在をかけることができないから。

たとえば、砂川闘争とか王子野戦病院反対闘争とか、大学の外側に出かけていってできる闘争はいっぱいあった。これは時間と体力を使えば誰でもできる。しかし、自分は卒業すればただのサラリーマンになっていってなんにも変わらない。これはもう明々白々なわけです。したがって、そういう闘争は闘争ではないというふうにも思えた。これから日本の社会の中をどう生きていくのか、日本の社会をどうつくっていくのかと考える時に、自分の責任でできることは何か、これが重要だったわけです。だから、全共闘という私たちの「自分を考える」というタイプの運動になった。

一方で民青、日本共産党というのは、冷戦の世界観であるマルクス主義と資本主義の対立という、できあいのもの見方で現実を切っていくばなんとかなるというふうにも考えた人たちが多かった。ですから、彼らにはなんの未来もないと思う。全共闘はある意味で稚拙で愚かでしたけれども、しかし未来がある。なぜならば、そこには戦後の矛盾が凝縮されているからです。戦後が建て前として推し進めていたはずの権力観、経済観、価値観というものと日本の現実のギャップがそこには集中的に表れていた。そこから新しいものが出てくるべきなんです」

各位

たいへんご無沙汰しております。ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

NHKスペシャルの取材の折には、大変お世話になりました。あらためて深く御礼申し上げます。

以前からお知らせしておりました通り、番組では十分に表現できなかったことを盛り込んで、本として出版する運びになりました。「チッソ・水俣」の回と合わせて、この「戦後50年」シリーズの3冊目に入ることになります。

テレビの番組づくりは、視覚化・単純化の連続で、取材した事実やインタビューの言葉の多くは番組からこぼれ落ちてしまいます。本の中ではそうしたものをなるべく掬い上げてみようとして努力してみたいつもりです。私のしつこい取材依頼に快く応じて下さった皆様に、この本の中で多少なりともそのご恩返しができたら、と願っております。

全力投球したつもりですが、番組終了後のきわめて短い期間に書かざるを得なかったこともあり、不十分な点や細かい誤りなどもあるかと思っております。テレビ屋が書いた拙い本ではありますが、ご高覧たまわれば幸いです。

取材へのご協力、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

1995年11月16日

NHK番組制作局 教養番組部

東野真 拜

〒150-01 渋谷区神南2-2-1

TEL: 03-5478-2981

FAX: 03-5478-2969

多くの人がもっている。一言では語りきれない、簡単には語れないという複雑な思いとなって彼らの口を重くさせる。また人によっては、組織的な暴力の行使という戦場体験に匹敵する重い経験を抱えている。

しかし、四半世紀が過ぎて冷戦も終わった今、全共闘を過去の「伝説」や「神話」にすることをやめて、そろそろ冷静に語る時期が来ているのではないかと。証言した人々が最後に語ってくれたさまざまな総括は、その貴重な手がかりを提供してくれている。特に、戦後史におけるその意味について語った橋爪大三郎の証言は示唆に富んでいる。

全共闘運動について考えることは、日本の戦後を考えることにはかならない。まさに、そこに「戦後の矛盾が凝縮されている」からである。